

〔西海紀游上〕沈香の事

大島に沈香の大木あり、文政壬辰の春、百姓深山に入りて木をおろす、日も既にくれしかば、木の葉をあつめて火にたく、其にほひかうだいなりしかば、夜明けて其あつめし木を見るに見なれぬ木なり、これにより殿様へ御訴へ申候處、さつまよりけん玄を遣し、御吟味のところ、沈香に相違なし、段々ふかく山にわけ入り尋ねしに、何と申候事ぞれず、追々に注進のよし、役掛り御人よりきく、

〔重修本草綱目啓蒙^{二十三}〕返魂香

補遺、長崎官園ニ沈香ト稱スル一樹アリ、ソノ幹周圍一尺許ナルヲ、三尺許ノ處ヨリ伐リ、今旁芽生長シテ丈許ニ及ブト云、弘化二年正月望日友人高井君ヲ訪ヒ、其所藏ノ沈香葉三枚ヲ目撃スルコトヲ得タリ、長サ七寸餘、濶サ三寸五六分、櫟ノ葉ニ似テ、前後尖リテ中濶シ、沈香ノ集解ニ葉似橘葉、又似椿葉ト云ニハ合ハズ、而シテソノ帶味辛クシテ香氣アリ、丁香ノ味ニ彷彿タリ、又丁香ノ集解ニ葉似櫟葉ト云ニ合スルニ似タリ、然レドモ未ダ其花實ヲ見ズ、又天保十五年蠻國ヨリ丁香樹ト稱スル者ヲ齋來セシニ、長崎ニテ枯ル惜ムベシ、コレ官園ノ沈香ト稱スル者ト同物ナルカ知ルベカラズ、

蜜香

〔倭名類聚抄^{二十}〕櫛音蜜、漢語抄云之岐美、香木也

〔箋注倭名類聚抄^下〕總本櫛作櫛、蜜作密、按作櫛作密與廣韻合、作櫛與玉篇合、則密蜜兩通、然此引唐韻作櫛、似是、按櫛、卽蜜香、證類本草上品引陳藏器載之、又千金翼方、證類本草下品有莽草、是櫛莽草、二物不同、而漢語抄以櫛爲之岐美、本草和名以莽草爲之岐美、二家其說不同也、源君兩載

〔本草辨疑^四〕蜜香木